

客員研究員活動報告

ルックイースト政策 30 年の功罪と今後の課題

岡本 義輝*

1 はじめに

ルックイースト政策は概念としては理解している人は多いと考える。しかし、マレーシアのどこで、日本留学のための日本語や理数教科の予備的な教育を受け、日本のどの大学や高専に留学し、何を学んでいるのかを知っている人は少ないのでは、と考える。まして、日本の大学や高専を卒業後のマレーシアでの就職先や日系 R & D への貢献度となると、なおさら解りにくい。そこで、具体的な仕組み等を明らかにし、課題を検討して行きたい。また、2002 年に小泉・マハティール両首相が合意した「日馬工科大学」構想が形を変え、マレーシア工業大学 (UTM) の 1 学部として、UTM・KL キャンパス (地下鉄 Ampang Park 駅から北へ車で 5 分) に 2011 年 8 月に開設・開学した。この大学 (M J I I T : Malaysia-Japan International Institute of Technology) は、日本に留学しないで、マレーシアで同じ成果を得ようとするものである。これについても報告する。

2 ルックイースト政策とは

マハティール (Mahathir bin Mohamad) は 1981 年 7 月に第 4 代首相に就任した。その後、22 年間首相の座を保ったあと、2003 年 11 月に退任した。マハティール首相は、就任翌年の 1982 年 2 月、クアラ・ Lumpur で開催された第 5 回日本マレーシア経済協議会の挨拶において、日本からの経済協力の更なる拡大を求めるとともに、日本や韓国の経験に学ぶ (Look East) ことが必要であるとして、マレーシア人のために日本での学習機会や研修機会を増大するよう日本に要請した。日本や韓国の経済発展の秘訣が国民の労働倫理や勤労意欲にあるとの観点から、日本の高度な知識や技術の習得のみならず、これらの日本人の労働倫理や勤労意欲を日本への研修や留学を通じて直接学び取る事を目的としたこの政策は、その後「東方政策 (Look East Policy)」と呼ばれるようになり、この政策の下、現在に至るまで 20 数年間にわたり毎年多くのマレーシア人留学生が日本に派遣されている。

* 本論文は、同氏の当研究センター客員研究員 (2012.9.11 - 2014.3.31) としての活動成果の一部である。なお、本誌 p.58 に記されているように、本論文の内容は、2013 年 11 月 11 日の当センター講演会でも報告された。

表1 ルックイースト留学生数

	1984	1985	1986	1987	1988	1989	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	
学部	39	45	64	79	81	84	81	88	104	114	135	123	128	
高専	24	28	30	29	30	30	29	50	65	78	92	89	88	
大学院	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	1997	1998	1999	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	計
学部	145	143	127	96	107	147	149	148	172	182	154	168	165	3,068
高専	96	94	84	54	-	47	56	69	79	61	71	76	74	1,523
大学院	-	-	-	19	18	17	16	19	18	18	23	11	11	170

出所：『マレーシアハンドブック2011』（マレーシア日本人商工会議所調査部編、2011年）

ルックイーストの留学生数を表1に示す。1984～2009年の26年間で大学の学部
に3,068人、高専に1,523人、合わせて4,591人の留学生と2000～2009年の10年間に
170人の大学院留学生が来日している。

東方政策は、それまでのマレーシアがそうであったように、発展途上国が「欧米
的」なモデルの先進国家を模範としていた中で、アジアの先進国である日本や韓国から
経済社会発展のためのノウハウを学ぼうとしたところに大きな特色がある。又、こ
のことはマレーシアがアジアの一員であるとの認識のもと、独自の伝統的価値観や文
化を維持しながら近代化を果たした日本や韓国にならい、独自のスタンスで自国の発
展を目指したマハティール首相の強い信念とリーダーシップの表れでもある。

この東方政策の重要な背景として、多民族国家マレーシアの重要施策の一つである
「ブミプトラ政策」を挙げる必要がある。ブミプトラ（マレー語で「土地の子」を意
味し、マレー人や先住民族を指す）政策とは、華人やインド人と比較して経済的に劣
位にあるマレー人を優遇し、彼らの生活を向上させ、他種族との貧富の格差を除去
し、それによって政治、社会の安定を目指す政策である。このブミプトラ政策は、マ
レー人が華人・インド人との競争力を養うことを目的としている。

3 日本留学予備教育機関

ルックイーストの予備教育機関の一覧を表2に示す。AAJとKTJは1982年、
1983年に教育を開始した。AAJは2013年で丁度30年になる。AAJとKTJは
マレーシア政府が運営している。その費用は一時期、円借款の時代もあったが、今は
AAJの教員給与を除いて馬政府が費用負担をしている。JADはマラ教育財団が運
営をしている。その費用は、円借款である。

学生はKTJの20人を除いてマレー人（ブミプトラ）である。この20人の華人学
生は優秀との評価を受けている。

AAJ、KTJ学生はマレーシアで2年間の日本語と教科（理科・数学）の予備教
育を受けた後、それぞれ、大学の1年次に入学、高専の3年次に編入する。

JADの学生はマレーシアで予備教育1年間と学部の1～2年次の教育を2年間の計3年間の教育を受けた後、日本の大学の3年次に編入する。いわゆるツインニング・システムの教育である。日本での留学先は、国立3大学、私学12大学である。

表2 ルックイースト予備教育機関

略称	AAJ	KTJ	JAD
正式名	Ambang Asuhan Jepun	Kumpulan Teknikal Jepun	Japanese Associate Degree
教育開始	1982年	1983年	1992年
主管	馬政府	馬政府	マラ教育財団
費用 教員給与	馬政府 日本	馬政府 馬政府	円借款 円借款
馬 で の 教 育 内 容	場所	マラヤ大学内 KL	マラ工科大学 シャーラム
	定員(人)	ブミ180	80(内ブミ60)
	教育期間	2年	2年
	予備教育	日本語 理科・数学	日本語 理科・数学
	専門教育	—	—
日 本	留学先	国立大理工系	高専
	留学年次	学部1年次入学	高専3年次編入
	留学期間	4年間	3年間
			国立3 私学12
			学部3年次編入
			2年

出所:各校の資料、ホームページより筆者作成

4 学部留学プログラム (AAJ)

4.1 AAJの概要

AAJは、マラヤ大学 (University Malaya) 予備教育部内に設置された日本留学特別コースである。日本の国立大学に入学するための2年間の留学プログラムである。

マレーシアの教育システムでは日本の高等学校に相当する教育が終了するまでの期間は小学校6年、下級中等学校3年、上級中等学校2年の計11年で、学生は終了と同時にSPM (Sijil Pelajaran Malaysia) と呼ばれる全国統一試験を受験する。AAJの入学生はこのSPMを受験した学生である。

マレーシアで大学入学資格を得る為には、更に、STPM (Sijil Tinggi Persekolahan Malaysia) と呼ばれる統一試験を受験する必要がある。大学進学を目指す学生は、STPM試験の準備のためにカレッジに進む。

SPM受験生で成績優秀なマレー人学生はSTPM試験の受験をせず直接大学に入学が認められる制度があり Matriculation (大学入学許可) と呼ばれている。そのような学生は正規の大学教育を受ける前に、大学内に設置されたPAS (Pusat Asasi Sains: 基礎科学センター) と呼ばれる予備教育部で自然科学系の教科の教育を1年間受ける。

AAJに入る学生の選抜は、教育省でなく人事院 (PSD: Public Service Department) が募集を行い、PASが優秀なマレー人を選んでいる。

AAJは組織上PASに併設された施設で、AAJに入学した学生は日本語の学習と並行して、数学、物理、化学の自然科学系基礎科目を受講する。

AAJの入学定員数推移を表3に示す。定員は1982年の開学時は75人、ピークの

2003～04 年は 180 人であった。2010 年はマレーシア政府の留学生削減方針に従い 120 人となった。学生は 100 % プミプトラである。

また、帝京マレーシア学院 (I B T : Institute Bahasa Teikyo) が文科省の「日本の大学入学のための準備教育課程コースの機関」の認定を受け、2004 年より学生の受け入れを開始した。I B T は現在、学生定員を 40 人とし、A A J と 2 校でマレーシア政府派遣学部留学生の準備教育を担当している。

日本政府派遣の日本人教員数は次の通りである。文科省派遣は団長 1 名 (日本語事情を担当)、教科教員 19 名 (数学 9・化学 5・物理 5) の 20 名 (定員) である。しかし、2010 年度は数学、物理各 1 名減の 18 名で運営されている。国際交流基金派遣の日本語教員は、12 名である。マレーシア人および現地採用日本人の 16 名含め計 28 名が日本語を教えている。2010 年度は、日本語・教科合わせて、46 名が教鞭を取っている。

表 4 に示すように、2 年間の予備教育課程は、1 年を 2 期に分けられている。第 1 学年前期は、日本人・マレーシア人教員による日本語の授業とマレーシア人の英語による教科の授業が実施される。第 1 学年後期以降は、日本語の授業および日本人教員による日本語での教科 (数学・物理・化学) とマレーシア人教員による英語の授業が行なわれる。

表3 入学定員

年度	定員
1982-84	75
1985-90	100
1991	120
1992-93	140
1994-02	160
2003-04	180
2005-09	160
2010	120

出所: AAJ 資料より作成

表4 予備教育課程

日程	1年		2年	
	前期	後期	前期	後期
	5/3-10/1	10/11-2/25	3/29-8/20	8/30-2/10
	日本語	日本語	日本語	日本語
教育	教科 (in 英語) (マレー人)	教科 (数学・物理・化学) (日本人)		
	—	英語 (マレー人)		

出所: AAJ 発行資料、HP より筆者作成

4.2 A A J の学生たちは、どんな学生？

A A J の学生のほとんどは、イスラム教徒である。彼らにとって金曜日は特別な日で、モスクへお祈りに行く。そのため、A A J の時間割では、金曜日の午後は少なくとも 3 時まで授業を入れることはできない。女性教師は、その習慣に敬意を表して、金曜日には、マレーの民族衣装で、日本の着物に相当するバジユクロンを着て教える。

学生たちは、教室に入ると、自然に男女が別れて座る。イスラム教では男女関係がたいへん厳しく、同じ部屋に男女が二人でいてはいけないことになっている。とはいえ、若い世代では、それほど堅苦しい様子は見せない。

女子学生は、トゥドンと呼ばれるスカーフのようなもので髪を隠し、バジユクロンを着て授業を受ける。男子学生は、襟のついたシャツを着ていれば良いことになっている。

AAJの学生は、先生方の意見を総合すると、素直で記憶力がよく宿題を出せば必ずやってくるので、教えやすいというのが一般的である。しかしその反面、宿題を出さないと何を勉強していいかわからない、自分で考えることができない、教えてもらうのを待っているだけだ、といった意見も聞かれる。一言でいってしまうと、覚えることが勉強だと思っている風に見える。そのおかげで、非漢字系であるにもかかわらず、2年生になると、「葬る」「退く」「隔たり」「被る」や「万国共通」「感触」「黙認」「利己的」などのマレー人にとっては難しい漢字読み書きができるようになる。教科の教員の意見では、公式は覚えるが、どうしてそのような公式になるかには興味を示さないということである。しかし、外国での1年間の教育だけで、日本語の教科の授業をそれなりに理解できるのだから、すごいものだと言語を語る人もいる。

(出所：国際交流基金のHP「現場の声 2002年度：日本語科 主任 植松 清先生」の報告より抜粋・作成)。

4.3 日本留学試験

AAJの学生は、2年間の予備教育を終えた後、日本留学の可否を判定する試験を受ける。第1期生(1982年入学)～第25期生(2006年入学)の学生は、「文部科学省試験」を受けた。この試験は、「日本語」が「文法・読解」「文字・語彙」「聴解」の3科目、教科が「数学」「物理」「化学」「英語」の4科目であり、2年次の1月に実施された。

AAJの学生は、「文科省試験」に合格すると日本の国公立大学へ留学することができた。しかし、マレーシアを除く世界中の学生が、日本の大学に留学するためには、「日本留学試験」(EJU: The Examination for Japanese University Admission for International Students, 日本の大学等で必要とする日本語力および基礎学力の評価を行う試験)を受けなくては留学出来ない。

AAJの学生は、入学した時点で、日本の国公立大学への入学がほとんど決定していると言っても過言ではない。それは、「文科省試験」の問題が、AAJで教えた内容の中から出題されるという「到達度を測る試験」だったからである。「文科省試験」の出題範囲は、「EJU」の出題範囲の半分ほどしかないという問題を抱えていた。そのため、「文科省試験」に合格して日本に留学して来るAAJの学生と、「EJU」に合格して日本に留学して来るAAJ以外の学生との間には、日本の大学に留学してからの学力には、歴然とした差が出ていると言われてきた。

そこで、この問題を解消するため、AAJの第26期生(2007年入学)以降の学生から留学可否の試験は「EJU」に変更された。この「EJU」は「総合力を測る試験」で、年2回6月と11月に行われる。AAJは11月の試験に焦点を絞っている。この変更によりAAJのカリキュラムの大幅な改革が実施され、授業量が1.6～1.8

倍に増えた。

ただ、この改革は 2007 年～2009 年の 3 年間の移行の暫定措置 (E J U : 50 % , 文科省試験 : 50 %) という形で行われたが、その後もこの暫定措置が続いているよう
 で問題である。

4.4 A A J 学生の日本留学先大学と入学者数

A A J の第 1 期生 (1983 年入学 /1984 年卒業) ～第 27 期生 (2009 年入学 /2010 年卒業) の 3,094 人が、表 5 の 66 国立大学と 3 私立大学に入学した。ただ、私立大学への進学は 11 期生からは中止となった。第 16 期生 (1998 年入学 /1999 年卒業) までは、社会科学系に 386 人が進学した。しかし、第 17 期生より廃止となった。それ以外の 2,708 人は工学部を中心とした自然科学系に進んだ。自然科学系の中に、生物履修が 1992 年入学～1995 年入学の 4 年間のみ開設された。社会科学系の廃止に伴い、マレーシア政府は、日本への留学を工学部に限定していたが、2007 年度から歯学・薬学部への留学が加わった。

一方、帝京マレーシア学院 (I B T : 学部留学プログラム参照) は自然科学系 20 人、社会科学系 20 人を定員とし、A A J と共に政府派遣学部留学生の準備教育を担当している。

表 5 A A J 留学先大学名と入学 学生数

大学	人	大学	人	大学	人	大学	人	大学	人	大学	人
北海道大	55	筑波大	37	新潟大	76	静岡大	65	鳥取大	50	九州大	54
室蘭工大	54	宇都宮大	51	長岡技科大	45	名古屋大	84	島根大	9	九工大	57
北見工大	42	群馬大	92	富山大	103	名工大	68	岡山大	85	佐賀大	59
旭川医大	5	埼玉大	69	富山医薬大	1	豊橋技科大	58	広島大	81	長崎大	45
小樽商大	11	千葉大	71	金沢大	60	三重大	46	山口大	87	熊本大	32
弘前大	24	東京大	6	福井大	65	滋賀大	25	徳島大	52	大分大	64
岩手大	64	東京農工大	38	福井医大	1	京都大	12	愛媛大	54	宮崎大	29
東北大	59	東工大	49	山梨大	79	京都工繊大	46	高知大	3	鹿児島	52
秋田大	79	東京医歯大	10	信州大	43	大阪大	38	香川	11	琉球大	37
山形大	77	電通大	55	岐阜大	60	大阪外語大	1	小計	432		
福島	14	一橋大	22	小計	553	神戸大	64				
茨城大	76	お茶の水女大	1			神戸商船大	3			慶応大	7
小計	560	横浜国大	55			和歌山大	36			明治大	17
		小計	556			小計	546			早稲田大	14
										小計	467

自然科学系	2708	+	社会科学系	386	=	合計	3094
-------	------	---	-------	-----	---	----	------

出所 : A A J の資料を筆者が編集作成

4.5 宇都宮大学のルックイースト

宇都宮大学に学んでいるルックイースト留学生の概要について、工学部電気電子工学科 2 年のナビラ (Nur Nabila Binti Makhtar : K L 出身) にインタビューした。その結果を表 6 に示す。A A J (Ambang Asuhan Jepun) 出身 15 人、I B T (帝京マレーシア学院) 出身 4 人、K T J (高専留学生 : 卒業後、学部に進学) 出身 2 人の合計 21 人である。K T J の 2 人もマレー人であるので、21 人全員マレー人ということになる。

I B T の定員が自然科学系 20 人、社会科学系 20 人であることは、前述したが、こ

のIBT出身4人中の1人が、宇都宮大学の文系である「国際学部」で学んでいる。男女別では、男子12人、女子7人である。

彼女に生活等について質問したところルックイースト留学生は寮に入れてもらえず、全員、民間アパートに住んでいるとのことだった。マレーシア政府は月額約13万円の奨学金を支給しているの、この金額と寮に入れないことは関係している、と筆者は考える。

ハラルの食事について、余り困っていないようである。基本的には自炊をして対応しており、学生食堂ではうどんが問題ないし、美味しいとの事である。好物は回転寿司で、先輩に連れられて時々行くとのことである。

表6 宇都宮大学・ルックイースト学生

1 学部・大学院別学生数 単位:人

学部				大学院(修士)		計
1年	2年	3年	4年	1年	2年	
7	3	5	4	2	0	21

2 出身予備教育機関 単位:人

出身校	学生数	注
AAJ	15	
IBT	4	1)
KTJ	2	2)
計	21	

3 男女別 単位:人

男	女	計
12	7	21

注1)理系:3人、文系:1人
注2)高専よりの進学
出所:筆者のMs.Nabila(宇都宮大学工学部2年生)への聞き取り調査に基づく

4.6 ルックイーストの帰国後の就職先

表7の日本の大学卒のマレー人65人がルックイーストと推定できる。何故なら30年間の国費留学生約3,000人は全員マレー人であるからである。H社とI社では、65人の約半数の34人が在籍している。そこで、この2社以外のR&D長に聞くと、「以前はルックイーストを多く採用したが、技術部門では役に立たなかったの、生産部門や品質部門に異動した。そこでは、

そこそこ役に立っている。今ではルックイーストはR&Dでは採用していない。」とのことであった。その理由は、「R&Dで製品設計に携わる場合、『Why(何故)』や『How(どのように)』が常に必要である。過去に採用したルックイーストは、この『Why』と『How』に少し欠けるところがあった。ところが、ルーチンワーク的な業

表7 マレーシア日系R&D11社 学歴別・人種別技術者構成

	A社	B社	C社	D社	E社	F社	G社	H社	I社	J社	K社	計	%	口技比
マレー	9	41	38	5	32	6	21	20	30	4	4	210	39.4%	
華人	55	84	6	15	54	12	22	25	15	4	2	294	55.2%	
インド	1	4	9	4	4	1	0	1	0	3	2	29	5.4%	
小計	65	129	53	24	90	19	43	46	45	11	8	533	100%	54.1%
日本大卒	0	2	5	2	6	5	3	19	15	1	7	65	86.7%	
華人	0	0	0	1	0	0	0	4	2	1	1	9	12.0%	
インド	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	1.3%	
小計	0	2	5	4	6	5	3	23	17	2	8	75	100%	7.6%
海外大卒	2	6	3	3	0	3	3	2	2	3	4	31	20.3%	
華人	16	5	1	4	6	16	15	25	22	2	2	114	74.5%	
インド	0	0	1	1	1	0	1	0	0	0	4	8	5.2%	
小計	18	11	5	8	7	19	19	27	24	5	10	153	100%	15.5%
高卒	6	17	0	24	5	6	4	30	16	29	0	137	60.9%	
華人	6	2	0	2	2	2	0	8	22	7	0	51	22.7%	
インド	0	7	0	18	1	2	0	1	7	1	0	37	16.4%	
小計	12	26	0	44	8	10	4	39	45	37	0	225	100%	22.8%
小計	17	66	46	34	43	20	31	71	63	34	15	440	44.6%	
華人	77	91	7	22	62	30	37	62	61	15	5	469	47.6%	
インド	1	11	10	24	6	3	1	2	7	6	6	77	7.8%	
小計	95	168	63	80	111	53	69	135	131	55	26	986	100%	100%
日本人	6	32	10	16	5	6	12	24	13	10	5	139		
総計	101	200	73	96	116	59	81	159	144	65	31	1125		

出所: 岡本 義輝(2009)『海外商品開発R&D技術者のローカル化の現状と課題』
『アジア経営研究No.15 2009』pp.131-140.唯学書房
注)口技比:ローカル技術者比率
<各社アンケートによる。発信日:2003.11.25、回答日:2003.12~2004.7の下記(月/日)>
A(6/30),B(1/20),C(12/17),D(12/11),E(2/3),G(12/9),H(12/18),I(2/6),J(12/2),K(12/2)

務では、力を発揮できることが解った。そこで、ルックイーストは主に生産・品質部門で採用している。」とのことであった。(2004 年調査)

5 高専留学プログラム (PPKTJ・KTJ)

5.1 PPKTJ・KTJの歴史

1981年にマハティール元首相が「東方政策」を発表し1982年から学部留学生に対する予備教育がAAJで開始された。そして1年後の1983年には日本の高専への派遣が始まった。当初、高専留学生は東京の国際学友会日本語学校(現:(財)日本学生支援機構,東京日本語教育センター)で1年間の予備教育を受けた後、国立高専の3年に編入した。

1990年からは、ITM(マラ工科大学,現:UiTM)で6ヶ月間の予備教育を受けた後、渡日し、国際学友会日本語学校で1年間の予備教育を受けた後、高専の3年に編入した。

1992年からは、マレーシア工科大学(UTM)のKLキャンパス(Jalan Semarak)に設けられた高専予備教育センター(PPKTJ:Pusat Persediaan Kajian Teknikal Jepun)で、高専留学生に対する2年間の予備教育が始まった。同時に、外務省から日本語教育の教員の派遣も開始された。留学生は、この2年間の予備教育課程を修了してから日本の国立高専に留学する。この2年間の教育プログラムは、以降、予備教育の中断時期前後を除いて定着していった。1993年文科省からの教科(物理,化学,数学)教員の派遣が始まった。

1997年に始まったアジア通貨危機の影響で、マレーシア経済が停滞した。PPKTJもその影響を受け、1999年高専予備教育センターは一時閉校となった。

しかし1年後の2000年、再び高専予備教育が始まった。マレーシアで初級レベルの予備教育を1年受けた後、日本へ留学する。そして、東京の国際学友会日本語学校で中級レベルの予備教育を1年間受けた後、高専の3年に編入する。マレーシア,日本1年ずつの予備教育であった。

マレーシアでの2年間の予備教育が2003年から再び、PPKTJで始まった。以降、マレーシアでの2年間の予備教育が定着した。

2009年、高専予備校育の主管がUTM(マレーシア工科大学)からUiTM(マラ工科大学)に移った。機関としてはUiTMの国際教育カレッジ(International Education College:略称INTEC)に所属している。名称は、マラ工科大学国際

表8 PPKTJ・KTJの歴史

年	沿革
1981	マハティール「東方政策」発表
1983	国立高専への派遣開始
1990	予備教育:馬6ヶ月、日本1年
1992	予備教育:馬2年 PPKTJ
1993	日本から教科教員派遣
1999	通貨危機で高専予備教育中断
2000	予備教育再開、馬1年、日本1年
2003	馬2年の予備校育再開 PPKTJ
2009	主管変更UTM→UiTM KTJ

出所:INTEC概要2011

教育センター東方政策プログラム高専予備教育コース（Kumpulan Teknikal Jepun：略称KTJ）である。教育場所もUTM KLキャンパスからUiTMシャーラムキャンパスに移動し、現在に至っている。

5.2 KTJの教育プログラム

KTJの高専留学プログラムは、AAJの学部留学プログラム（前述を参照）と良く似ている。従ってAAJとは少し角度を変えながら説明する。JPA（マレーシア人事院）は、中等教育修了者が受験したSPM（中等教育修了試験）の成績から入学者を選抜する。学生は、2年間の予備教育（日本語、数学、物理、化学、英語）を受けた後、マレーシア政府の奨学金を受けて、日本の国立工業専門学校（高専）3年次に編入学する。

KTJの教員は日本人13人（日本語7人、教科6人）とローカル12人（日本語5人、教科3人、英語4人）の合計25人である。（2011年7月現在）

2011年度の年間授業時間数を表9に示す。1コマの授業時間は50分である。日本の中等教育までの年限は633制の12年に対し、マレーシアは632制の計11年で1年短い。一方で日本の高専では2年次までに高校3年次までの理数科目の履修を終えている。その対策として1年次にマレー人教師による英語での理数科目の授業を行い、日本の高校3年次に相当する内容が一部盛り込まれるようにしている。

2年次では日本人教師による日本語での「数学」「物理」「化学」が始まる。そして、理数科目の履修は高専2年次までのシラバスの完全履修と専門用語の習得を目的としている。

6 マレーシア高等教育基金事業（HELP）

6.1 HELPとJADの教育プログラム

マレーシア高等教育基金事業（HELP：Higher Education Loan Project）は、日本の円借款にとってマレーシア政府が実施する留学生派遣事業である（表10参照）。

表9 授業科目と時間

単位：時間(1コマ50分)			
年次	1年	2年	計
日本語	682	434	1116
英語	32	62	94
数学	135	186	321
物理	54	155	209
化学	52	155	207
倫理	22	0	22
Ko-PLN	20	0	20
科学技術 日本語	0	93	93
計	997	1085	2082

出所：INTEC概要2011

表10 HELPの教育システム

第1期事業		1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	6年目
HELP1	コース 年次	予備1年	予備2年	大学1年	大学2年	大学3年	大学4年
1992-2002	場所	マレーシア			日本		
第2期事業		1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	ツイ ニング
HELP2	コース 年次	予備1年	大学1年	大学2年	大学3年	大学4年	
1999-2007	場所	マレーシア			日本		2+3
第3期事業		1年目	2年目	3年目	4年目	5年目	ツイ ニング
HELP3	コース 年次	予備1年	大学1年	大学2年	大学3年	大学4年	
2005-2014	場所	マレーシア			日本		3+2

出所：日本国際教育大学連合のHPより

この事業の第 1 期 (HEL P1) は 1992 年 4 月～2003 年 3 月に実施された。マレーシアで 2 年間の予備教育を受けた後、日本の大学 1 年に入学した。学生数は 5 バッチ計 310 名であった (入学～卒業の 6 年間で 1 バッチという)。

第 2 期事業 (HEL P2: 52 億 8,500 万円の円借款) は、1999 年 4 月～2008 年 3 月まで行われた。学生数は 5 バッチ計 299 名である。この 2 期事業の特色は、現地で大学教育の一部を実施しその後日本の大学に編入留学する「ツイニング・プログラム」の導入である。これによって、日本の留学に掛かるコストの削減と現地高等教育の拡充が実現された。外国人留学生に対する「ツイニング・プログラム」は日本の大学史上初の試みであるため、私学を中心とした 13 大学のコンソーシアムが、「単位の認定」「共通シラバスの作成」「現地の大学教育の方法」等を多岐にわたり検討した。このツイニングの現地教育を JAD プログラム (Japanese Associate Degree, 日本名: 日本マレーシア高等教育連合大学プログラム) と呼んでいる。

第 3 期事業 (HEL P3) は、2005 年 4 月に始まり 2015 年 3 月に終わる予定である。この HEL P3 は、HEL P2 の 2 + 3 「ツイニング・プログラム」をマレーシア側の学部教育を 1 年から 2 年に増やし、日本の大学の 3 年次に編入留学するものである。

6.2 HEL P とツイニング・プログラム

HEL P は進化しつづけ、HEL P2 では 2 + 3 ツイニング (マレーシアの教育 2 年。日本の教育 3 年) を導入した。HEL P3 では 3 + 2 ツイニング (マレーシアの教育 3 年。日本の教育 2 年) により、日本での滞在期間を短くすることで留学コストを削減した。

また、HEL P3 では、学部留学の AAJ や高専留学の KTJ の予備教育のみと違い、マレーシアで工学部機械工学科、電気工学科の専門科目の教育が行われている点も大きな特徴である。

少し JAD の説明から外れるがこのツイニングについて述べてみたい。マレーシアではこのツイニング・プログラムは、一般的に普及している高等教育プログラムである。特にフランチャイズ (Franchise) ・プログラムは、国外での修業年限を縮小し、マレーシアで 2 年間、相手国で 1 年間の履修を行うだけで学位 (Degree) が取得できる「2 + 1」や、あるいは海外に行かなくともマレーシア国内における 3 年間の履修だけで相手国の学位が取れる「3 + 0」といったプログラムもある。

筆者は 2000 年～2003 年にマレーシアに駐在し、3 年間で約 150 人の技術者の採用面接を行った。その内の数人が、KTAR (Tunku Abdul Rahman College: 華人系の短大、取得出来る卒業証書は Diploma) 出身の技術者であった。彼らは「3 + 0」ツイニングを利用し、海外に留学せずに KTAR で大卒の学位 (Degree) を取得し

た。国内の大学はQuata制（入学定員が人種別人口比率となっており，成績優秀でも華人は枠内での入学しかできない）で門が狭く費用の関係で海外留学したくても出来ない華人学生の努力の結果であった。

6.3 JADの一般教育カリキュラム

JADでの一般教育の科目数と授業時間は表11の通りである。予備教育：10科目1,110時間，大学1年次：17科目1,043時間，大学2年次：7科目240時間で，計34科目2,393時間である。なお，授業の1コマは予備教育60分，大学教育90分である。また，表11の科目で一番上にある「英語1・2」とは，「英語1（30時間）」，「英語2（30時間）」の2科目のことである。表13を簡略にするために，このような表記とした。以下の「数学1・2」等も同じである。

英語，数学，物理，化学，情報処理，等の基礎科目に加え，創成科目，制御工学，インターネット基礎，情報通信基礎の工学系基礎科目，さらには日本の経済と経営，地球と環境，の工学を取り巻く課題の科目もある。そして，基礎日本語，工学日本語，科学技術日本語，文章表現法，日本研究，等の科目が，1～2年次のマレーシアでの学部教育と3～4年次の日本留学に向けての日本語習得と理解を深める科目である。

もちろん日本の大学と同じように，体育関係の科目も体育実技，健康・体育理論の2つがある。

大学1～2年次の一般教育科目と機械専門科目の合計は2143時間である。そのうち一般教育科目は1283時間で一般教育の比率は59.9%であり，3～4年次の日本留学での専門教育に備えるカリキュラムとなっている。

6.4 JADの専門教育カリキュラムと教員数

表12に機械コース，表13に電気電子コースの専門科目を示す。表12の科目の5行目にある「材料力学2・3」は2科目を表の簡略化のために1つにまとめた。以下も同様である。各専門科目は日本留学で学ぶ3～4年次の専門教育に向けた基礎的な科目である。

2009年度の教員数を表14に示す。常勤34人，非常勤14人の計48人である。常勤34人のうち70.5%の24人が日本人である。また，常勤24人の日本人のうち14

表11 一般教育科目

	科目	時間
予備教育	英語1・2	60
	基礎日本語	300
	工学日本語	285
	工学入門・コンピュータ	60
	創成科目1・図学	60
	Islamic Studies	45
	数学基礎	120
	物理基礎	120
	化学基礎	60
	小計	1110
大学1年次	英語3	45
	科学技術日本語	269
	文章表現法	45
	創成科目2	22.5
	数学1・2	135
	物理学1・2	135
	化学1・2	135
	情報処理1・2	90
	インターネット基礎	22.5
	情報通信基礎	22.5
	体育実技	45
	健康・体育理論	31.5
Malaysian Studies	45	
小計	1043	
大学2年次	日本研究	45
	数学3・4	90
	工学倫理	30
	日本の経済と経営	31.5
	地球と環境	22.5
	工学特別セミナー	21
小計	240	
計	2393	

出所：JAD資料より筆者作成

人 58.3 % が日本語の教員である。専門科目の常勤教員は、機械、電気電子の各 3 人の合計 6 人と少なく、非常勤の教員による集中講義や遠隔授業でカバーしている。理数と電気電子の科目は主に芝浦工業大学、日本語は主に拓殖大学の教員が担当している。

表12 機械コース専門科目

	科目	時間
1 年次	機械工学概論	31.5
	工業力学	45
	材料力学1	45
	小計	122
2 年次	材料力学2・3	90
	機械設計1・2	90
	熱力学1・2	76.5
	機械計測	45
	機構学・機械要素	45
	機械材料	31.5
	加工学	45
	機械力学	45
	流体工学	45
	機械工学実験1・2	90
	機械工作実習1	90
	制御工学	45
	小計	738
計	860	

出所: JAD 資料より筆者作成

表13 電気電子コース専門科目

	科目	時間
1 年次	電気電子工学概論	31.5
	電気電子数学	31.5
	電気回路理論1	45
	小計	108
2 年次	電磁気学1	90
	電気回路理論2	90
	電子回路1・2	90
	高度情報処理1・2	90
	物性工学	45
	電気電子計測	31.5
	電気機器	31.5
	電力工学	31.5
	電気工学実験1・2	90
	電子工学実験1・2	90
	制御工学	45
小計	725	
計	833	

出所: JAD 資料より筆者作成

表14 教員数(2009年度実績)

常勤	分野			非常勤(夏期集中, 遠隔授業含む)			
	日	馬	計	分野	日	馬	計
日本語	14	2	16	Islamic Studies	—	1	1
英語	—	1	1	Malaysian Studies	—	2	2
体育	—	1	1	情報	2	—	2
数学	1	1	2	経済(注1)	1	—	1
物理	1	1	2	環境(地球と環境)	1	—	1
化学	1	1	2	機械	3	—	3
情報	1	—	1	電気電子	4	—	4
機械	3	2	5	計	11	3	14
電気電子	3	1	4	注1: 経済(日本の経済と経営)			
計	24	10	34				

日: 日本人、馬: ローカル 出所: JAD 資料より筆者作成

6.5 M J H E P (Malaysia-Japan Higher Education Program)

HEL P 3 の次のステップである M J H E P は、マラ教育財団 (Yayasan Pelajaran M A R A) が事業主となり、100 % マレーシアの予算で運営されている。校舎はスランゴール州バンギの少し南東の Beranang にある専門学校 M J I I (M A R A-Japan Industrial Institute) 内に設置された。

Universiti Kuala Lumpur の Institute of Product of Design and Manufacturing の学科として申請中である。

学生数は、定員 150 人で H E L P 時代の 80 人の 2 倍弱である。しかし、定員には達していない。実際の在籍学生数を表 15 に示す。

教員構成を表 16 に示す。2014 年度で、総数 52 名である。ローカル化のために教員の給与水準が、H E L P 3 に比べ大幅に落ちた。教員確保に向けての今後の課題である。

2014 年 4 月に 3 年次に編入を受け入れる大学は、表 17 に示す 20 大学である。H E L P からの継続受入れが 13 大学、M J H E P から新規に受け入れに加わったのが 7 大学である。

表15 MJHEP学生数

Batch	学年	人員
Batch1	学部2年	90
Batch2	学部1年	107
Batch3	予備教育	125
計		322

注)2014年度 単位:人
出所: MJHEP資料より筆者作成

表16 MJHEP教員構成

	理工系・ 一般科目	日本語	イスラム・ 体育・英語
日本人	11	17	0
マレー人	14	6	4
計	25	23	4

注)2014年度、単位:人
出所: MJHEP資料より筆者作成

表17 日本側受け入れ大学

継 統	芝浦工大	拓殖大
	岡山理科大	近畿大
	東海大	東京工科大
	東京電機大	東京理科大
	明治大	立命大
新 規	埼玉大	豊橋技科大
	山口大	
	愛媛大	九州工大
	熊本大	長岡技科大
	兵庫県立大	福井大
	室蘭工大	

注)2014年4月、3年次編入
出所: MJHEP資料より筆者作成

7 マレーシア日本国際工学院 (Malaysia-Japan International Institute of Technology : M J I I T)

7.1 M J I I Tの開校

2011年9月6日(火)、KL市内において、マレーシア日本国際工科院(MJIIIT)のオリエンテーションが実施され、初年度の学部生約60名および大学院生30名が参加した。MJIIITでの授業は、9/12(月)から開始した。

MJIIITは、マレーシアにおいて日本型の工学系教育を行う学術機関であり、日・馬首脳間の合意を踏まえ、2010年5月にマレーシア政府により設立が決定された大学である。日本は、日本国内の大学を中心としたコンソーシアムから、日本人教員の派遣、カリキュラムの策定等の協力を行っていく。現在のコンソーシアム参加大学は、24大学である(表18)。

MJIIITは、日本とマレーシアとの間の人的交流促進に寄与することはもとより、日本式工学教育を受けた優秀な人材を育成する場として、ASEANの工学教育のハブとなり、アジアをリードする高等教育機関に発展していくことが期待されている。

7.2 開校までの経緯

MJIIITは、マハティール元首相の提唱により1982年から開始された「東方政策」の集大成として、マレーシアに日本型の工学系教育を行う大学を設立する構想から出発した。2001年に馬政府から国際工科大学設置の提案を受け、日・マレーシア首脳会談にて構想を推進することで一致。校舎は、Ampang Park 駅より車で5分のJalan SemarakにあるUTM国際キャンパス内に建設された。

日本側では、協力大学の他、外務省、文部科学省、経済産業省、日本商工会議所及び国際協力機構(JICA)から成るコンソーシアムを形成し協力を行っている。

表18 コンソーシアム参加大学

	大学
1	九州
2	慶応義塾
3	埼玉
4	芝浦工業
5	拓殖
6	東海
7	東京農工
8	長岡技術科学
9	名古屋工業
10	北陸先端科学技術大学院
11	明治
12	立命館
13	立命館アジア太平洋
14	大阪
15	山口
16	近畿
17	東京工科大学
18	東京電機
19	東京理科
20	岡山理科
21	九州工業
22	金沢
23	豊橋技術科学
24	山形

出所: MJIIIT資料

M J I I T は、表 18 に示す日本の大学 24 校の協力を得ている。

2001 年に馬政府が提案した日馬国際工科大学構想は、2002 年 1 月の小泉・マハティール会談で合意した。しかし、M J I I T が 2011 年 9 月に仮開校するまで、約 10 年掛かっている。その間の日馬首脳会談の経緯を表 19 に示す。玉虫色の会談のまとめである。長引いた理由を関係者に聞くと次の通りである。事務方の打合せで、日本からの資金を、日本側は円借款で、馬側は無償資金協力で、と互いに主張し折り合いが付かなかった。ところが、2010 年のナジブ首相来日時にマレーシア側が「円借款」を受け入れることで事態は急展開し、日馬工科大学構想の実現に向かって行った。

表 19 首脳会談における MJIT に関する内容抜粋

	首脳	日時	場所	会談内容
1	小泉/マハティール	20020110	馬	小泉)マハティール首相提案の教育面での協力: 大学をマレーシアに設立することについて検討して貰いたい。
2	マハティール/小泉	20021212	日	技術大学構想については、永続するものとなるよう周到に準備し、しっかりしたものを作っていくことで意見が一致。
3	アブドゥラ/小泉	20050525	日	アブドゥラ)マレーシア日本国際工科大学設立構想は前進している。両首脳は二国間のみならず ASEAN にとっても重要な構想であるという認識で一致した。
4	小泉/アブドゥラ	20051213	馬	マレーシア日本国際工科大学準備センター開所式
5	安倍/アブドゥラ	20070824	馬	アブドゥラ)MJIT 設立構想、現在両国で準備を進めているが、早期の実現を希望する。安倍)本件は、両国の協力案件として非常に重要なものである。
6	アブドゥラ/福田	20080523	日	福田)早期開設を実現すべく、馬側具体案の早期提示に向けた一層の努力を希望。アブドゥラ)本件はとても重要なプロジェクトであり、その実現に向け努力したい。
7	ナジブ/鳩山	20100419	日	両首脳は、高等教育分野における既存の交流を歓迎し、工学分野での日本の経験を可能なところでマレーシアの高等教育に取り入れるための協議を双方が継続していくことで一致。

出所: 外務省 HP から筆者作成

7.3 M J I I T の設立とその背景

- 1) M J I I T は 2001 年以來議題に上がってきた日馬政府間のプロジェクトである。2010 年 8 月 1 日に創立。2011 年 9 月に最初の入学者を受け入れた。
- 2) マレーシアの高等教育省の支援を受けている。(ローカル学部生の 60 % は政府によって奨学金を与えられる。表 20 の 5 奨学金、参照) 現在、その奨学金については、J P A (人事院: Public Service Department (英語表記 P S D)) が 100, M A R A (M A R A 教育財団: 馬政府企業家開発省傘下) が 100 の支出を約束している。
- 3) 円借款 (66 億 9,700 万円, 8,700 万米ドル) と 15 ~ 20 % の日本の大学の協力、による日本政府の支援がある。
- 4) 校舎はクアラ・ルンプール Jalan Semarak にある U T M (University Technology Malaysia: 本部は Sukudai Johor 州) の国際キャンパスに置かれる (10 階建ての新築校舎)

表 20 に M J I I T の開学に関わる 2011 ~ 2017 年の予算を示す。総額 793,326 千

リング (211.8 億円) である。そのうち円借款は、252,567 千リングで全予算の 31.8 % を占めている。

表20 予算(2011~2017年)

	項目	分担	費用(単位:千リング)	比率	備考
1	経費	高等教育省	355,038	44.75%	
2	実験設備	円借款	243,500	30.69%	円借款計253百万リング 31.8%
3	建物	高等教育省	58,721	7.40%	
4	コンサル費	円借款	9,067	1.14%	↑(2の備考に含む)
5	奨学金	高等教育省	57,000	7.18%	ローカル学部生の60%のみ
6	インフラ費用	高等教育省	70,000	8.82%	
7	計		793,326	100.00%	211.8億円

出所: MJIT資料より筆者作成

(RM1=¥26.699)

7.4 MJITをUTM傘下とする高等教育省の決定

高等教育省は次の6項目を基本にMJITを運営してゆくことを決めた。

①部分的に自律性を持ったUTMの私的なウイングである。②私学と同じ授業料を徴収できる。③7年間マレーシア政府から支援を受ける(円借款含む)。④マレーシア政府による7年間の支援の後には1,000人のローカル学部生に奨学金を与える。⑤授業言語は英語である。また基本日本語コースは必須である。⑥海外から入学する学生は40%とする。

筆者は次のように考える。予算の制約から当初構想された独立した「日馬工科大学」にならなかったのではと推測する。ただし形は学部であるが、ある程度の自律性がある大学と考えて良い。また、授業言語が日本語でなく英語になったのは大変喜ばしい。グローバル時代において、米国語や英国語ではない世界共通語である「英語」であるのは必然の流れである。

7.5 MJITのビジョン

ビジョンは次の通りである。日本の最先端技術の教育を行い、これに産業と社会の持続可能な成長に対するマレーシアの特殊性をブレンドしたリーダーを育てる。

表21に2011年度の在籍学生数、表22に今後5年間の入学募集学生数を示す。

表21 在籍学生数

2012年2月28日現在

	学部		大学院		計
	電子工学	機械工学	修士	博士	
マレー人	32	32	19	16	99
留学生	1	0	1	11	13
計	33	32	20	27	112

出所: MJIT資料から作成

表22 5年間の入学募集者数

年度	学部		大学院		計(留学生比率)
	マレー	留学生	マレー	留学生	
1 2012/13	180	90 (33%)	135	135 (50%)	540 (42%)
2 2013/14	340	170 (33%)	345	345 (50%)	1,200 (43%)
3 2014/15	500	250 (33%)	475	475 (50%)	1,700 (43%)
4 2015/16	600	300 (33%)	600	600 (50%)	2,100 (43%)
5 2016/17	640	320 (33%)	725	725 (50%)	2,410 (43%)

出所: MJIT資料から作成

7.6 MJITのミッションと目標

ミッションは次の通り。①電子・精密・環境工学の分野でイノベーションと創造性

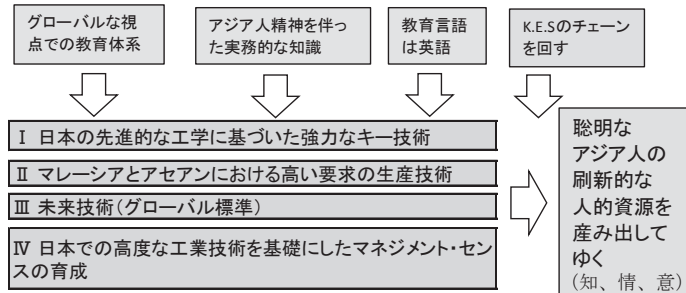
を通じて、学術・研究面での卓越したリーディングセンターとなる。②日本の労働文化の良い面に焦点を集め、その知識と技能を学生に与える。

目標は、高いレベルの技術・研究能力を持った人的資源を育成する。そして、すぐれた労働文化を植え付ける。その結果、アセアン地域における地域協力の促進はもちろん、マレーシアの国際競争力の強化にも貢献する。

7.7 技術的な教育と研究への準備に対するMJIIITの考え方

技術的な教育と研究に対するMJIIITの考え方を表23に示す。グローバルな視点での教育等を通して、日本の先進的な高度中核技術とアセアンに必要な高レベルに生産技術等を授業言語「英語」で教育する。そ

表23 技術的な教育と研究への準備



注) K.E.S : Knowledge, Experience, Self-directed learning
出所: MJIIIT資料から作成

してK.E.S.(表23の注を参照)のサイクルを回す。その結果として聡明なアジア人の革新的な人材を産み出すのが狙いである。

7.8 MJIIITの教員

表24 年次別教員拡大計画

年	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017
マレー人	14(6)	15(25)	64(26)	119	183	218	250	259
日本人	0(0)	6(4)	16(6)	32	38	41	25	20
計	14(6)	21(37)	80(40)	151	221	259	275	279

出所: MJIIIT資料から筆者作成 注: ()内は実数、但し2012/13年の計は合わない

そのうち、日本人教員数が

2015年にはピークの41人と計画されている。2012年の教員の国籍、職位別の人員を表25に示す。表24の2012年の括弧内の計40人がベースとなっている。

MJIIITでの日本人教員採用は、色々と課題があると推測する。若手の優秀な教員(研究者)は欧米の大学なら喜んで行く。それは、そのことが研究者の業績になり、帰国後に学者としてのステップアップにつながるからである。逆に、博士号を取得したばかりのポストドク研究者は、採用は容易であるが、研究歴や経験も浅いのでマレーシア側も必要としないだろう。

表25 2012年度教員

国籍	人	職位	人
マレーシア	27	教授	9
馬(研究休暇)	4	准教授	5
日本	6	講師	19
バングラデシュ	1	助教	3
英国	2	研究休暇	4
計	40	計	40

出所: MJIIIT資料から筆者作成

また、日本の大学では数年間休職したあと、元の大学に戻るとようなシステムがないので、MJIIITの教員は定年になった人や、期限付きの教員が対象とならざるを得ない。前者は、定年まで勤め上げたこともあり、何か面白くないことがあると

辞めてしまうことになる。後者は、日本で良い仕事があるとそちらに行ってしまう。M J I I Tの特色である英語での教育も、日本の大学で授業を英語で行った経験がある教員は少ないと考える。特に高年齢の教員にはそれがまた負担になる。

今回のM J I I Tの使命は、日本人教員が「日本の先進的な工学」を「高いレベルの技術・研究能力を持った人的資源」に教育・育成するのであり、日本として初めての経験でもある。日本の文科省は、優秀な教員をマレーシアに派遣出来るような仕組みづくりを考えるべきである。

8 まとめ

8.1 ルックイースト政策の評価すべき点

今後の歩むべき道について論じてみたい。表26に2011年の日本への留学生数を示す。中国は87,533人(63.4%)、韓国は17,640人(12.8%)と、この2カ国だけで全体の76.2%を占めている。マレーシアは2,417人(2.5%)で第5位である。

表27に日本への留学生数とマレーシアからの留学生数の推移を示す。留学生数の1~3位は、1984年から一貫して中国、韓国、台湾の順である。マレーシアは2006年までずっと4位であったが2007年にベトナムが4位に上がりマレーシアは5位となった。

マレーシアからの留学生の比率は1988年~1999年は4%前後で推移している。これは正にルックイースト政策の結果だと言える。日本へのマレーシア人留学生は最近のベトナムを除きアセアン諸国に比べて多い。このことはプラザ合意以降の日本企業のマレーシア進出に際しても、マレーシア人の日本的な労働倫理や勤労意欲の学習に好影響を与えると共に、親日感情の醸成にも大きな力となった。

2013年はルックイースト30周年で、記念式典も行われた。しかし、このままAAJ, KTJ, 次期JAD, M J I I Tを継続してやっていくには課題も多いと考える。次の8.2では筆者が考える改善課題を提起したい。

表26 2011年留学生数

	国	留学生数
1	中国	87,533
2	韓国	17,640
3	台湾	4,571
4	ベトナム	4,033
5	マレーシア	2,417
6	タイ	2,396
7	インドネシア	2,162
8	ネパール	2,016
9	その他	15,307
	計	138,075

出所: 日本学生支援機構

表27 留学生数推移

年	日本への留学生数	内マレーシアから		
		人	比率	順位
1984	12,410	402	3.24%	4位
1988	25,643	1,201	4.68%	4位
1989	31,251	1,310	4.19%	4位
1990	41,347	1,544	3.73%	4位
1991	45,666	1,721	3.77%	4位
1992	48,561	1,934	3.98%	4位
1993	52,405	2,105	4.02%	4位
1994	53,787	2,276	4.23%	4位
1995	53,847	2,230	4.14%	4位
1996	52,921	2,189	4.14%	4位
1997	51,047	2,128	4.17%	4位
1998	51,298	2,040	3.98%	4位
1999	55,755	2,005	3.60%	4位
2000	64,011	1,856	2.90%	4位
2001	78,812	1,803	2.29%	4位
2002	95,550	1,885	1.97%	4位
2003	109,508	2,114	1.93%	4位
2004	117,302	2,010	1.71%	4位
2005	121,812	2,156	1.77%	4位
2006	117,927	2,156	1.83%	4位
2007	118,498	2,146	1.81%	5位
2008	123,829	2,271	1.83%	6位
2009	132,720	2,395	1.80%	5位
2010	141,774	2,465	2.50%	5位
2011	138,075	2,417	2.50%	5位

出所: 日本学生支援機構

8.2 ルックイースト政策の今後の課題

1) ルックイースト理念の終焉

学部留学AAJ, 高専留学KTJ, ツイニング留学JAD, 日本国際工学院MJIIITのルックイースト4教育機関を表28に示す。

マハティール元首相は、就任直後に日本の経済発展の秘訣が国民の労働倫理や勤労意欲にあるとの観点から、それらに加え、日本の高度な知識や技術を日本への留学や研修を通じて学ぶという東方政策

(Look East Policy) を打ち出した。

この考え方は2000年頃までは正しかったと言える。しかし近年の日本、特にマレーシアの輸出入の1/3を占める電機電子産業は失われた10～15年

と言われるように精彩を欠いている。労働倫理や勤労意欲も低下している。もはや、日本がマレーシアの先達を務めるには面映ゆい状況である。技術立国日本が光輝く状態に回復するまで、ルックイースト政策の一旦中断も検討すべきである。

2) 教育(授業)言語を英語に

グローバル化の時代にそぐわない「日本語」での教育は理念の終焉と共に役割を終えるべきである。その点ではMJIIITは英語で日本技術の良さを教育しようとしている点は評価できる。AAJ等が日本留学を続けるにしても、日本での英語による工学教育が必要である。

3) 生産や品質部門のみでなくR&Dでも役に立つルックイーストへ

WhyやHowのないルックイーストが多いと4.2で述べた。日本の大学には、マレーシアからの留学生に暗記教育から脱皮させ「何故?」を考えさせる教育を望みたい。また、MJIIITには「考える学生(技術者)」の指導育成にあたって頂きたいと切望する。

表28 ルックイースト4教育機関

		AAJ	KTJ	JAD	MJIIIT
日本留学	入学年次	学部1年次	高専3年次	学部3年次	
	履修期間	4年間	3年間	2年間	なし
	授業言語	日本語	日本語	日本語	
馬での教育	予備教育	2年	2年	1年	なし
	学部教育	なし	なし	2年	4年
	授業言語	日本語	日本語	日本語	英語

出所:筆者作成